

セラーズと概念主義

村井 忠康（慶應義塾大学）

知覚の哲学における概念主義とは、知覚経験は感覚的意識として概念能力の現実化であるという主張である。したがって、それは正しく理解されるなら、知覚経験の感覚的側面を消去しようとするものでももちろんない。だが、そうした意図をもたない、つまり知覚経験の感覚性を深刻に受け止めるとはどういうことであろうか。ひとつの自然な答えは、知覚と思考の区別を維持するということであろう。たとえば、代表的な概念主義者であるマクダウェルは、『心と世界』において、知覚経験特有の直接性を強調することでこの区別を維持しようとした。彼によれば、知覚経験は思考と同様に命題的・概念的な内容をもつとしても、（それが誤っていなければ）世界の事実を感覚的に現前させる。しかし、こうした立場では、知覚に関する基本的特徴が見失われてしまうように思われる。つまり、知覚内容は思考内容と異なり、事実や命題といった抽象的存在者ではなく、日常的な具体的対象としての個物であるという直感が、この種の内容主義では救えないように思われるのである。概念主義は、思考が一般性と抽象性を特徴とするのに対して知覚は個別性と具体性を特徴とするという伝統的な見方までも否定するものでなければならないのだろうか。本発表では、この伝統的な見方と両立しうるような概念主義の理論的可能性を探る。

この探求の手がかりとして注目したいのは、マクダウェルの概念主義のその後の展開にも大きな影響を与えているセラーズの知覚論である。彼は、われわれの知覚経験に概念能力の現実化という「思考」の側面があることを強調したが、概念主義者であったことは一度もなかった。しかし他方で彼は、経験における概念と感覚の統合のあり方を捉えようと腐心し続けた。そこには、概念主義者にとっても考慮に値する多くの論点を見出すことができる。本発表では、彼の知覚論から次の三つのテーゼを取り出して検討する。

- (1) 経験の概念的内容は命題的である。
- (2) 経験の概念的内容は命題的ではなく「直示句的」である。
- (3) (たとえば) 視覚経験は、有色の対象について思考すること(thinking about colored objects)ではなく色で思考すること(thinking in color)である。

セラーズがこれらのテーゼのあいだの関係をどのように考えていたのかは、解釈上の重要な問題であろう。しかし本発表では、それぞれのテーゼを概念主義へと修正する試みに専念したい。(もちろん、(1)の修正は『心と世界』でマクダウェルが提案したタイプの内容主義を生み出すだろう。) とりわけ、謎めいた定式化である(3)に含まれる洞察を汲むことにより、知覚経験の個別性と具体性を捉えうる概念主義を提案するつもりである。